巻頭言

四国植物防疫研究協議会への想い

愛媛県農林水産研究所 農業研究部長 奈尾雅浩（なおまさひろ）

2021年10月から四国植物防疫研究協議会（以下，協議会）会長を拝命している。理由は明確であり，年1回開催される協議会大会を次年度は愛媛県がお世話することから，慣例的に当番県の病害虫防除所長（兼務）がお引き受けするためである。ところで，私自身の協議会への入会は愛媛県の新採職員となった1987年であり，今現在既に30有余年を経過した。この間，協議会では県内外の諸先輩・諸先生から多くのご指導・ご助言をいただいたご恩がある。このため，巻頭言への寄稿を依頼された機会に協議会への「想い」をまとめてみたい。

有史以来，洋の東西を問わず人類は多くの感染症に悩まされてきた。旧約聖書に感染症対策を示唆する記述があったり，我が国でも収束の気配を見せない新型コロナウイルスによる感染拡大，昨年末に愛媛県内の養鶏場で初めて確認された高病原性鳥インフルエンザの発生等枚挙にいとまがない。一方，人類が農耕という食糧生産システムを導入して以来，植物（作物）の病害虫の多発は数え切れない重篤な被害をもたらしている。一例を挙げると1732年（享保17年）の大飢饉の惨禍は本県でも激甚であったようで1943年に愛媛県農会が発行した「愛媛県農業史（中巻）」では「松山藩領内に於いては餓死人3,489人，牛馬斃死3,097頭に及んでいる……7月以来は浮塵子（ウンカ）の大発生を見るに至り……今は一粒の米も取り得る見込みがない」等の史実を伝えている。また，冷害年に幾度となく多発したイネいもち病など，発生生態の解明や防除対策が確立された現代でも，病害虫は我々に減収という事実を突きつけてくる。言うまでもなく病害虫対策は県域単独で完結するものではない。近隣する各都道府県が形を問わず連携することは自然発生的なものと考える。

四国地域においては，これに資する連携の場が協議会であり，1954年（昭和29年），地域の病害虫研究会の中で最も遅く小さなエリアで設立され，毎年，四国4県の持ち回りで継続して大会が開催されている。この大会に初めて参加したのは1988年の徳島市。一般講演を聴講したとき，「いつかはこの場で発表したい」と思った記憶がある。その後は1996，2013年の2か年以外，下手な講演発表を計20回行いながら2021年に高松市で開催された大会まで末席に名を連ねている。

2008年に松山市で開催された大会の懇親会で本県OBの重松嘉昭先生に乾杯ご発声のお願いにご自宅を訪問した当年10月6日，協議会設立のお話を伺うことができた。そのとき記したメモを読み返すと，「1949年に新居浜市にあった肥料工場が再稼働するなど，硫安が安定供給されてから多肥栽培等を原因とするイネいもち病が多発するようになった。高知県で倉庫にあった農薬を散布（1950年の高知県農試技師小川正行先生による試験）し，水銀剤のセレサンに本病への防除効果を見いだした。このとき，薬害軽減に消石灰で薄めた調剤を用い（1953年，製剤化を工夫した日本特殊農薬(株)がセレサン石灰として上市），薬効と薬害はないことを確認した。この結果を受け，四国各県でも本剤によるイネいもち病の連絡試験を行い防除上の実用性が得られたので，当時四国農業試験場におられた木谷清美先生が旗振り役を務められ，本成果の普及を一つのきかっけに試験研究機関だけでなく行政・メーカー・団体が一体となり『食糧増産』を目標に掲げ本協議会の設立に至った」とのご説明をいただいた。発足の総会は香川県琴平町にある「わたや」という老舗旅館で開催されたとのご記憶。「雪が降る3月だったかなあ」とのお話も伺った（注意：本協議会は昭和29年9月，徳島県で開催された「秋冬作会議」で設立されており，その前の打合せのご記憶か？）。当日の酒宴は大いに盛り上がったことは容易に想像され，この伝統は（も）我々に脈々と受け継がれている。このように諸先輩の熱意が結集された協議会に入会する機会を得て以来，毎年大会に参加する中で他県に同世代の知己が増えていった。「人生最高の出会いは再会である」との話を聞いたことがある。まさに毎年11月，大会を通じて互いの息災を「再会」の形で確認している。

協議会設立以来，事務局は四国農業試験場・四国研究センターに置かれていたが，同センターからの病害虫を専門とする職員の異動に伴い，2013年4月から事務局を各県が持ち回ることとなり，紆余曲折を経て，現在は庶務事務局を(一社)日本植物防疫協会高知試験場に，編集事務局を西日本農業研究センターにご担当いただき，協議会が運営されている。

会員にもベテランと新採という年齢構成の二極化が見られ，会員数の減少などから現状維持が難しくなっており，今後の在り方に関する議論が開始されている。定年延長があったとしても今後10年で顔ぶれは一新されるであろう。何事もなくしてしまうことはたやすい。諸先輩から受け継いだ伝統を次世代にどのような形でつないでいくべきか，燈火を次々と受け渡す「燈々無尽」という言葉で考えている。

（四国植物防疫研究協議会 会長）

植物防疫